

栃木県埋蔵文化財 センターだより

発行 平成22年2月26日
栃木県教育委員会
宇都宮市埜田1-1-20
TEL 028-623-3425
編集 (財)とちぎ生涯学習文化財団
埋蔵文化財センター
下野市紫474
TEL 0285-44-8441
FAX 0285-44-8445
URL <http://www.maibun.or.jp>

2010
2月
やま
かい
どう



CONTENTS

- 埋蔵文化財センターが実施する整理作業から
・田島持舟遺跡（足利市）・西刑部西原遺跡（宇都宮市）・西根2遺跡（岩舟町）
- 埋蔵文化財センターが実施した発掘調査から
・舟場平遺跡（那珂川町）・小鍋内II遺跡（さくら市）・北ノ内遺跡（市貝町）
- 市町教育委員会が実施した発掘調査から
・祇園城跡（小山市）・車塚古墳（壬生町）
- 「おおむかし わんぱく体験」の開催
- 特集 お茶の今昔
- 埋蔵文化財センター普及事業の紹介
・土器作りに挑戦・職場体験の様子

埋蔵文化財センターが実施する整理作業から

1. 古墳時代の土製六鈴鏡・田島持舟遺跡（足利市）

田島持舟遺跡は足利市田島にあります。北関東自動車道の建設に先立ち、平成16～18年に発掘調査を行いました。今年度整理作業を行い、来年度報告書を刊行する予定です。

田島持舟遺跡は、縄文時代から中・近世までの集落の跡と考えられ、たくさんの遺構・遺物が確認されました。今回は、その中から、古墳時代の「土製六鈴鏡」を紹介します。

銅製鏡の周りに鈴をつけた「鈴鏡」を真似て粘土で焼いて作ったものが「土製鈴鏡」で、鈴の数が名称に表れています。田島持舟遺跡のものは、鈴を表現した瘤が6個あるので「土製六鈴鏡」と呼ばれています。

「鈴鏡」は、関東地方で出土する女人（巫女か）埴輪の腰に下げられているものがあり、祭祀に関わる特殊な道具と考えられています。「土製鈴鏡」にも同じような役割があったのでしょうか。

田島持舟遺跡の「土製六鈴鏡」は縦6.1cm・横7.2cm・厚さ1.3cmで、竪穴住居跡の堆積土の中から出土しました。「鈴鏡」や「土製鈴鏡」の確認例は決して多くはなく、竪穴住居跡からの出土は極めて稀です。



土製六鈴鏡



鈴鏡着装復元

2. 黒曜石で作られた旧石器・西刑部西原遺跡（宇都宮市）

西刑部西原遺跡は、宇都宮市と上三川町にまたがる東谷・中島土地区画整理事業に先立ち、平成9年度～19年度まで発掘調査が行われました。同じ遺跡内にある琴平塚古墳群と推定東山道跡はすでに報告書が刊行されています。平成20年度からは旧石器～縄文時代、古墳時代～平安時代の集落跡（住居跡約130軒）の整理作業を行っています。

平成12年度に調査された後期旧石器時代の遺物集中地点（以下ブロック）は3か所あり、主に黒曜石で作った石器類が600点以上出土しました。現在整理作業中ですが、①石器類は、その95%が不純物が少なく、透明度が高いことから遠隔地産と思われる黒曜石製であること。②遺物の内容は石核・剥片・碎片の他、少量の尖頭器・スクレイパー・ナイフ形石器・石刃などの道具類を含むこと。③ブロック内およびブロック間での接合資料や製作途中のものがあることから、石器製作の場と考えられること。などがわかりました。

今後は黒曜石の産地を調べたうえで、遺跡の性格や年代の検討を進めていく予定です。



スクレイパー（削るための道具、左の長さ 6.9 cm）



剥片・碎片（石器を作ったときに出土せず）

3. 甦った400年前の漆器椀・西根2遺跡（岩舟町）

西根2遺跡は、平成17年度に北関東自動車道建設に先立ち発掘調査が行われました。古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡や15世紀後半から16世紀の掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡等が発見されました。平成20年度に整理作業を行い、すでに平成21年3月に報告書が刊行されています。

写真は溝跡から出土した漆塗りの椀です。発見された当初は水浸しで9つに割れバラバラ、木地の木質が失われている部分もあり、漆膜でかろうじて形状を保っている状態で、もろくて手で触れられないくらいでした。

それを復元、化粧直しをしたのが右下の写真です。パズルのように組み合わせて接合し、欠けているピースは樹脂で補い完成。400年ほど前の江戸時代初期の形がよみがえりました。赤色の漆椀で、外面中央に黒色の漆で桜の花びらが描かれています。乾燥させたので重さも半分以下に…ダイエット大成功です。

保存処理は時間がかかるため、報告書には残念ながら間に合いませんでしたが、ここに復元された姿を掲載します。



復元前の漆器椀



復元後の漆器椀

埋蔵文化財センターが実施した発掘調査から

4. 那珂川沿岸の古代集落・舟場平遺跡（那珂川町）^{ふなばだいら}

舟場平遺跡は、古墳時代後半から平安時代の初め（約1,500～1,200年前）にかけて、那珂川東岸の段丘の上に営まれた村の跡です。

今回の発掘調査は、県道拡幅工事に伴うものです。道路両側の狭い幅の調査でしたが、古墳時代後半から平安時代の竪穴住居跡18軒、掘立柱建物跡1棟、室町時代の墓穴と考えられる長方形の穴などが発見されました。

古墳時代の住居跡は調査範囲の南側、平安時代の住居跡は中央付近で多数発見されました。これらの住居跡には、壁際にカマドが作り付けられており、古墳時代のものは板石で補強しています。また、住居跡からは当時の土器が多数出土し、平安時代の住居跡では、「須恵器」と呼ばれる窯で焼かれた硬い土器も出土しています。

舟場平遺跡の北には、県内最大の横穴式石室を持つ川崎古墳や、崖に穴を掘って造られた横穴墓が多数存在します。また、旧小川町には奈良～平安時代の役所跡があります。今回の発掘調査で、久那瀬の地にも、これらの古墳や古代の役所と同じ頃の村があったことがわかりました。



調査風景（南から）



第2号住居跡のカマド

5. 大型掘立柱建物跡を確認・小鍋内Ⅱ遺跡（さくら市）^{こなべうち}

小鍋内Ⅱ遺跡は、喜連川丘陵地帯を南流する江川を見下ろす緩やかな南東斜面上にあります。発掘対象面積は6,400㎡で、これを便宜上、北区・西区・東区に分けて調査をしました。その結果、縄文時代前期（約6,000年前）、古墳時代後期（約1,500年前）、平安時代（約1,200年前）の竪穴住居跡28軒、掘立柱建物跡10数棟、井戸跡2本、大小様々な形の土坑の他、土器や石器・中国の北宋銭「紹聖元宝（1094年初鑄）」などが発見されました。

確認された遺構のうち、西区で発見された大型掘立柱建物跡（側柱式）は、柱の掘りかたが長方形（長辺約1.3m、短辺約1m）で、その深さは70cm以上あったと推定できます。この建物の床面積は30.24㎡あり、一般的な集落で発見される掘立柱建物跡が床面積20㎡くらいであるのに比べ、大型ということになります。

大型掘立柱建物跡の多くは、官衙（役所）などで発見されるのですが、なぜ小鍋内Ⅱ遺跡で発見されたのでしょうか。一つには、有力者が住んでいたと見てよいでしょう。それだけでしょうか。なぜ解きは、今後の研究で明らかにしていく予定です。



大型掘立柱建物跡



紹聖元宝

6. 小貝川沿岸の大集落・北ノ内遺跡（市貝町）

北ノ内遺跡は市貝町の中央部、栃木県北部の塩那丘陵（喜連川丘陵）に連なる南那須丘陵の南部に所在しています。遺跡のすぐ西側には小貝川が南流し、遺跡が位置する丘陵は南西方向に緩やかに傾斜しています。発掘調査は北ノ内遺跡の南端が農地整備の範囲にあたるため、工事に先立って実施されました。

発掘調査の結果、縄文時代中期（約5,000～4,000年前）の竪穴住居跡1軒と袋状土坑8基、古墳時代から古代の竪穴住居跡68軒、掘立柱建物跡3棟などを確認し、縄文時代と古墳時代から古代にかけての集落跡が存在したことが判りました。

北ノ内遺跡と同じ小貝川左岸の丘陵上には、南方0.5kmに前原遺跡、同じく1.3kmに仁王地遺跡があります。また、小貝川右岸には、3.5km南に平安時代の大型住居跡や倉庫・仏堂が調査された寺平遺跡があり、北ノ内遺跡が小貝川流域の市貝町周辺に展開する古墳時代から古代にかけての新たな大規模集落の一つであることが明らかとなりました。



遺跡全景（上空から）



古墳時代後期の竪穴住居跡（南から）

市町教育委員会が実施した発掘調査から

7. 小山氏の居城・祇園城跡（小山市）

祇園城跡は、小山駅の西400mに所在する城跡で、平成3年に国史跡に指定されました。今回の調査は、史跡の整備事業に先立ち、城跡の現況調査と遺構確認のため実施したものです。

祇園城跡は、長い期間小山氏が城主となり、戦国時代には北条氏、江戸時代になると本多氏へと城主が替わります。今回の調査区は、城の南側で、江戸時代初頭、徳川幕府が日光社参のため造営した「小山御殿」が所在した区域です。

調査の結果、建物跡や井戸跡・堀跡などが見つかりました。また、下層からは、埋め戻された堀や方形竪穴などが調査され、この区域が大きく造成されたことがわかってきました。これらの造成工事は、出土遺物の年代から、16世紀後半におこなわれたと考えられ、北条氏が城を普請したものと想定されます。また、この造成面の下には、小山氏時代の遺構や遺物が数多く残っています。これらの調査によって、祇園城の変遷のようすが明らかになってきています。

（小山市教育委員会 0285-22-9659）



調査区遠景（南上空から）



遺構確認状況（南から）

8. 二重周溝の大円墳・^{くるまづか}車塚古墳（壬生町）

「車塚古墳」は壬生の市街地より、北東に約1km離れた黒川東岸の台地上に築かれた大円墳です。墳丘は三段に築かれ、表面は葺石に覆われています。墳丘の直径は約82mを測り、古墳時代終末期においては国内最大級の規模を有します。

今回の発掘調査は、壬生町教育委員会が主体となり、古墳の周囲に築かれた周堤帯の外側に、車塚古墳に関連する遺構の有無を調べるために行いました。

調査は車塚古墳周堤の外側に、試掘溝を3本設定し調査を行いました。各試掘溝からは周堤から約1mの間隔をおき、幅約6mの周溝跡と思われる溝を確認しました。第1試掘溝については、溝内に堆積した覆土を除去した結果、約1mの深さがある車塚古墳の二重目の周溝であることを確認することができました。

県内でも多くの終末期の古墳の調査が行われていますが、今回のように二重目の周溝が確認されたのは初めてです。二重目の周溝を含めた総全長は約140mを超え、さらに車塚古墳の規模が拡大することが判明しました。周溝内からは須恵器の甕の破片などが出土しています。

（壬生町教育委員会 0282-82-8544）



車塚古墳遠景（東上空から）



二重目の周溝（南東から）

「おおむかし、わんぱく体験」の開催

10月17・18日の両日、栃木県および（財）栃木県民公園福祉協会主催の「とちぎグリーンフェスタ2009」の協賛事業として、壬生町のとちぎわんぱく公園において「おおむかし、わんぱく体験」を実施しました。

屋内では、同町に所在する縄文時代の八剣遺跡から出土した土器や石器を展示し、4,000年前の本物の土器を持ったり、当時の代表的模様の縄文をつける体験をしてもらいました。また、屋外では秋空の下で、勾玉作り・塗り絵・土器パズル・弓矢の試射など、こどもから大人まで1,500人を超える参加者で賑わいました。



縄文施文体験



昔の文様の塗り絵



土器パズル



弓矢の試射

特集 お茶の今昔 ～遺物からみるお茶の歴史～

ほんの少し前まで、日本でお茶といえば「緑茶(抹茶・煎茶)」のことを指したと思います。ところが、最近では各地の紅茶や烏龍茶をはじめ、いろいろな種類のお茶が手に入り、珍しいお茶も身近なものになりました。今回は遺物や絵巻などからお茶の歴史をふりかえります。

【お茶の起源】 茶のルーツは中国雲南省とされています。760年頃に唐の陸羽が書いた『茶経』には、今から4,000年ほど前に中国の伝説上の帝王で薬の神様である神農が、解毒のために茶を飲んだと書かれています。また、紀元前59年に漢の王褒が書いた『僮約』に「武陽(四川省の都市)で茶を買う」という記述が見られるので、この頃にはお茶が栽培され、売買されていたとわかります。その後、世界各国にもたらされ、それぞれの地域で独自の喫茶文化がつけられるようになりました。

【日本のお茶の始まり】 815年に「嵯峨天皇が僧永忠より茶をふるまわれた」と平安時代に書かれた『日本後紀』にあり、これが一番古い記録です。しかし、室町時代に一条兼良が書いた『公事根源』には、729年に「般若経の読経をし、二日目に茶をふるまう」とあり、奈良時代にも茶が飲まれていた可能性があります。また、最澄が805年に唐から持ち帰った茶を滋賀県の坂本に植えたとも伝えられています。この頃、遣唐使や留学僧によって日本にもたらされた



釜

火舎

瓶

2 山城国府跡から見つかった
緑釉陶器の釜・火舎・瓶

たお茶は、茶葉をつき固めて乾燥させた「団茶(餅茶)」(1)であったと思われます。これを削ってお湯を注ぎ、飲んでいたようです。京都府の山城国府跡からは当時の喫茶道具と考えられる緑釉陶器の釜と火舎(組み合わせるとお湯を沸かす道具)・瓶(水差し)・碗など(2)が出土しています。



1 団茶

【抹茶と天目茶碗】

遣唐使の廃止で喫茶も一時下火になりますが、平安時代の終わり頃、栄西が抹茶や道具を持ち帰りました。この頃、茶道具は天目茶碗(中国浙江省の天目山の寺院に留学した僧が黒い釉薬をかけた茶碗を持ち帰った)などの中国産のものが珍重されましたが、日本でも鎌倉時代の終わり頃になると天目茶碗を愛知県の瀬戸窯で作るようになりました。1351年に描かれた『慕帰絵詞』(3・4)には、茶筌や天目茶碗など、現在使われているものと同じような道具が描かれています。この頃の喫茶の作法は、給仕が湯を入れた瓶と天目台に載せた天目茶碗を客前に持って行き、客に茶碗を持たせたまま、茶碗に入った抹茶に湯を注ぎ次々に点てていくもので、今も京都の建仁寺で行われている四頭の茶礼(5)に近いと考えられています。



3 慕帰絵詞模本(永井如雲・石原重盛筆)左下の棚の上に茶道具



4 慕帰絵詞(模本)の一部を拡大
茶筌と盆の上に茶碗や茶入れ



5 四頭茶礼道具一式

この頃の喫茶の作法は、給仕が湯を入れた瓶と天目台に載せた天目茶碗を客前に持って行き、客に茶碗を持たせたまま、茶碗に入った抹茶に湯を注ぎ次々に点てていくもので、今も京都の建仁寺で行われている四頭の茶礼(5)に近いと考えられています。

【喫茶の一般化】^{いつ}室町時代には一服一銭（一銭＝一文）の茶が寺社の門前などで売られるようになり（6）、喫茶が一般の人々にも流行します。

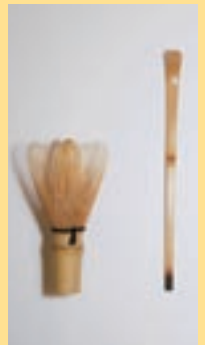
戦国時代になると天目茶碗などの茶道具が各地の遺跡から出土しますが、抹茶は限られた人々（僧侶や大名・豪商など）がたしなんでいたと思われま

す。福井県の^{いちじょうだにあさくらしいせき}一乗谷朝倉氏遺跡からは茶碗や茶入れ・茶杓・茶筌など（8・9）が出土していますが、現在の茶道具と比べてもほとんど変わりません。

江戸時代の中頃には、町人が経済的に豊かになり抹茶をたしなむ人は増加しましたが、江戸市内から出土する茶碗や急須などをみると、下級武士や庶民は抹茶ではなく煎茶を飲んでいたと考えられます。



6 七十一番職人歌合（狩野晴川・勝川模）
右 一服一銭の茶売り 左 煎じ物売り



7 現在の茶杓と茶筌



8



9

8・9 一乗谷朝倉氏遺跡出土の茶道具と花器

【栃木県内出土の茶道具】



10 下野国分寺跡出土の火舎

栃木県内で一番古い茶道具の出土例は、下野市下野国分寺跡から出土した平安時代の緑釉陶器火舎の破片(10)です。火舎の口縁部から透かしにかけての一部分が山城国府跡出土のもの(2の左)に類似しています。

戦国時代になると、^{じょうかんあと}城館跡などから天目茶碗や茶臼などの茶

道具が出土する例が多くなります。宇都宮市^{とびやまじょうせき}飛山城跡からは茶臼(11)や天目茶碗、真岡市^{しもかげ}下陰遺跡では15世紀頃の天目茶碗や茶入れ、小山市^{かなやま}金山遺跡では天目茶碗(13)が出土しています。また、野木町^{せいろく}清六皿遺跡からはお湯を沸かすための瓦質の土釜(14)が出土しています。他にも小山市の^{ぎおんじょうあと}祇園城跡や佐野市の^{さのじょうせき}佐野城跡や唐沢山城跡でも天目茶碗や茶臼が発見されています。



11 飛山城跡出土の茶臼 14世紀



12 現在の石臼でお茶を挽いた様子



13 金山遺跡の天目茶碗 16世紀頃



14 清六皿遺跡の土釜 15世紀

埋蔵文化財センター普及事業の紹介

土器作りに挑戦

博物館・資料館などが開催する土器作りに、職員が講師として出向いて、お手伝いをします。土器作りでは、粘土を紐状にして積み重ね形を作った後に文様をつけます。

土器作りの後、1ヶ月程度おいてから、野焼きします。焼くときに割れないよう、時間をかけてゆっくりと乾燥させ、熱を加えていくのがコツです。うまく焼けるかは運次第？！



粘土紐の積み重ね



土器作りの様子



土器の乾燥



焼き上げ



焼き上がり

職場体験の様子

埋蔵文化財センターでは、中学校などからの依頼による職場体験を積極的に受け入れています。通常センターで行っている遺物の整理作業を行います。水洗・注記だけでなく、縄文土器片の拓本とりや実測作業も体験します。みんな、はじめての「仕事」だけど、熱心に取り組んでいます。



土器の接合



土器の水洗



注記



拓本



実測

埋蔵文化財センターの見学・体験学習・職場体験等のお申し込みは
ホームページ <http://www.maibun.or.jp> をご覧のうえ普及事業担当まで TEL 0285-44-8441